

親と子—アメリカ・ソ連・日本—

服部祥子



新潮選書

3年アメリカ、5年ソ連の海外生活を含む、約20年の歳月を、妻・母・精神科医として生きてきた。三役ともやり甲斐があったし、日米ソの生活もそれぞれ面白かった。しかもその間つねに、「親と子」のテーマを、学問的にも日常的にも追い求めることができて幸いだった。子どもの精神的危機と親の問題に直面せざるを得ない現代だからこそ、これまで私なりに考え、心の裡うちに蓄積してきたものを、今書きとめて置きたいと思う。 著者

おや こ — アメリカ・ソ連・日本 — 〈新潮選書〉
親と子



© Sachiko Hattori Printed in Japan, 1985

昭和六十年七月二十日 発行
昭和六十年十月三十日 六刷

定価 八三〇円

著 者 服 部 祥 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 株 式 会 社 三 秀 舎

製 本 植 木 製 本 株 式 会 社

東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一

発 行 所 株 式 会 社 新 潮 社

郵 便 番 号 一 六 二

電 話 業 務 部 (0303) 二 六 六 一 五 一 一
編 集 部 (0303) 二 六 六 一 五 四 一 一

振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

ISBN4-10-600288-4 C0336

カ・ソ連・日本一

服部祥子

新潮選書



序章 遠めがねで眺めれば——日・米・ソの親子——

出たり、入ったり。

日本を、日本へ、である。

ソ連（三年）↓日本（三年）↓アメリカ（三年）↓日本（二年）↓ソ連（二年）↓日本（三年）、これはここ十五年間に、私が歩いた軌跡である。（カッコ内はその年数）

夫の仕事の都合で、家族ぐるみで三回、外国に出かけた。その期間を足し算したら、八年間になつてゐた。ソ連にもアメリカにも興味を引かれたし、学ぶことや考えることも多かった。けれど外国は外国。それ自体はあくまでもオブジェクト（対象物）である。私にとってのサブジェクト（主題）は、つねに日本であり、日本人であつた。

外国の空の下、遠めがねで眺めた日本と日本人。遠めがねだから、よく見えたということもあるかもしれない。

今は日本に居て、教育と医学の世界の片隅に身を置いている。沢山の人々、ことに問題を持つたさまざまな子どもに出会う日々の中で、その顔の向こうにある、子どもをとりまく世界をも眺

めている。

やはりここでも遠めがね、精神科医の遠めがねである。近視眼的にならぬよう、光軸の長い遠めがねで、視点を近くから遠くまで伸ばしながら、眺めたい。

では、遠めがねで一体何を眺めようというのか。私の場合、それはつねに「親と子」であつた。ただしぜひこれを、と初めから決心して選んだのではなく、ごく自然に私の裡で芽生え、育つていった興味であつた。

たとえば、遠めがねで過去をふり返ってみると、まず一番に浮かび上がってくるのは一つの情景。

おそらく四つか五つの頃であろう。当時住んでいた田舎の畑で、私は一心に土いじりをして遊んでいる。うららかな春の日で、小鳥のさえずりより他には、何も聞こえない。ふと目をあげると、すぐそばに母がいる。見渡すかぎり人影はなく、あつたかい大地は眠つたように静まりかえっている。その時、子どもの私は、何ともいえぬしあわせな思ひに満ちて、微笑を浮かべる……。おそらく誰でも、心の遠めがねで幼少期を眺めれば、何かこうしたごく日常的でありふれた情景が浮かび上がってくるにちがいないが、私にとってあのシーンは、消えることのない鮮やかさをもつていつでも眼前に再現することができる。今から思うと、まだ小さくて言葉で表現するすべを知らなかったが、おそらくあの瞬間に、自分と母が、大いなる自然のふところの中で、きわめて平和に、全き調和をもつて結ばれた存在である、と感じていたのではないかと思う。「親と子」の結びつきの私の最初の直感であろう。

その後の学童期や思春期も、遠めがねで映し出してみると、不思議に「親と子」のテーマが多いのに気付く。誉められたり、叱られたり、従順にしたり、反抗したり、なごやかだったり、喧嘩をしたり……。『親と子』の絆は、さまざまな強さや色合いを見せて、私の裡に存在し続けた。

時は流れ、初めてわが子を胸に抱いた時の情景も、私にとって一つの衝撃的シーンである。まだ身体のしっかりしていない小さなみどりごを、おぼつかない手つきで抱きあげた新米の母親。あの瞬間、たしかに私は、今までのわが身一つという感覚が、親である自分と生まれ出でたわが子という二つの存在感覚に広がつていくのを感じたようである。あれは親になったばかりの私の胸に湧き起こってきた、新しい「親と子」の主題曲だったのであろう。それはその後も、子育ての中で親である自分に向き合うつど、鳴り響いた。

さらに私は子どもを対象とする精神科医になった。その結果、子どもとその親に出会う日々が増えた。そしてますます「親と子」のテーマは、身近なものになって行った。

このように私は、子、親、精神科医というさまざまな立場に立つなかで、また日本、ソ連、アメリカというさまざまな国に住むなかで、「親と子」のテーマを見つめ続けてきた。それはきわめて楽しく面白い作業であり、非才の身ながら私なりに生涯の仕事と心に決めている。

こうして、流れる水のようにとぎれることなく長い間「親と子」を私は眺めてきたが、もとよりこの作業はまだ未完成であり、途上にある。しかし、これまで私なりに感じ、考え、心の裡に蓄積してきたものを今どうしても書きとめて置きたい衝動にかられている。それは昨今の日本では、「親と子」のあり方があまりにむずかしく考えられ、本来きわめて自然で健やかな営みであるはずの親子が、奇妙に重苦しい不安なトーンに彩られて存在していることが、気になってならな

いからである。

登校拒否、家庭内暴力、心身症、非行、いじめ等々、子どもの精神は日々危うくなっていると
言われ、母親の育て方が病気の原因であるとか、父親がしっかりしていないため子どもが強くな
らないなどと非難される。親はわが子を見る視線に心配と動揺を強く潜ませ、親としての自分へ
の不全感をつのらせる。そうなると子どもの方も、親への疑惑と不信を芽生えさせることになる。
「この子は今に登校拒否や家庭内暴力になるのではないでしようか」とほんのわずかな行動や感
情の揺れに怯えて深刻な顔で相談に駆け込む親や、子どもの面前で苦しみに満ちた表情をして、
自分の育て方の誤りや欠陥を悔悟する親を見ながら、私はいつも深い悲哀を感じる。これでは親
であることも、子であることも何の楽しみもなくなり、ただお互いに困難で重い「親と子」とい
う軛（くびき）を引きずって生きることになりはすまいか。これはいけない、と私は強く思う。

もとより私は、現代の「親と子」のかかわりの複雑さも、真に成熟した人間を育てる困難さも
感じている。「放つていても子は育つ」という時代は終った。人類はもはや、本能に従う素朴で自
然な生き態（さま）から、歴史上未曾有の複雑で高度に人工化された営みへと、生きる基盤を移してしま
った。したがって親も、わが子を自然に湧（も）れる泉のように、あるがままの真情をもって愛おしむ
だけでは、愛は不十分である。愛は知恵であり、愛は技術であらねばならない。ただ知恵であり、
技術であるからには、正しい知識を身につけねばならない。

では親の知恵を基礎づける知識とは何か、これを思いめぐって親は右往左往し、行くえ定めぬ
不安定な気分になりやすい。多くの情報の氾濫する今日、真面目にあれこれ蒐集する人がかえつ
て混乱し、親としての方向性も自信も危うくしてしまふ皮肉さえおこっている。

私は「親と子」のあり方をより確かなものにする知識は、さほど多いとは思わない。また難解なものとも考えない。親の役割は一言で言えばどの子もその子なりに、身体的・精神的・社会的に成熟していくよう力を貸してやることであるから、そのために必要なことは、人間の発達の正しい道筋を知ることにはほかならない。つまり一個の人間存在が、幼い日から大人へ、そして死に至るまで、一歩一歩段階を追って発達していくという論理を、しっかりと把握することである。

悲観論のうずまく中で、私はあえて楽観論をとる者である。子を思う親の気持の強さでは、日本の親は世界のどの国の人にくらべても、ひけをとらない。それにメンタリティー（精神性）の高さもある。いたずらに動揺せず、人間の成熟を目標に、正しい知識を自分のものとすれば、生き残るチャンスは十分ある。

「親と子」のかかわりは旅のようなものである。親であり、子である運命を味わい、道づれとなって共に歩む旅である。熱意と勇気を胸の裡に秘め、未来に希望を抱いて、元気に旅をしたい。時々「発達」という確固たる道標をたしかめ、道を大きく逸れぬだけの配慮をしながら、あとは心を自由に大きく開いて、楽しみつづ歩みたい。

遠めがね、私は遠めがねで眺めることが好きである。これは、まだ子どもの頃、親戚の男の子に、紙筒にレンズをつけただけの簡単な望遠鏡を見せてもらって以来のことである。初めて目に当てた時、はるかかなたの家々や山の木々や流れゆく雲が、信じられぬほど明るくはつきりと見え、呼吸を呑んだ。その時子ども心に、望遠鏡さえあれば、どんな遠い世界にある真実でも、この小さな筒の節穴を通して、自分の手許まで引き寄せることができるかと信じられた。「親と子」

という遠大なテーマを前にして、遠めがねを初めて手にした時と同じような胸の高まりを今感じている。

目次

序章 遠めがねで眺めれば——日・米・ソの親子—— 3

第一章 成熟することのむずかしさ 15

一 未熟な日本の子ども

礼子さんとキャシーに共通するもの 未熟さゆえに不適応な礼子さん
キャシーの激しくゆがんだ心 ソ連のフリガンの脆弱さ

二 未熟性を生み出す土壌

子どもをとりまく自然の喪失 画一性を重視する学校 親の自己不全と過干渉 国際的には箱入りの日本

三 経験欠乏症候群

遊びの欠乏 学びの欠乏 情動体験の欠乏 情動体験の欠乏の次に

第二章 生いたちの時代——子どもの発達学 54

一 旅立ちと胎生期

二つの旅立ち風景　莊嚴で神秘的な受胎ドラマ　胎生期の病と危

険　親となる自覚を大切に

二 信頼と乳児期

よるこびという名のおさなご　出産という試練　乳児期の精神発

達　乳児期の病氣　世界の子育て

三 独り立ちと幼児前期

ほしぶどうちゃんの歩いた日　性格形成のキーポイント　躰はゆ

るやかに、たゆみなく　働く母の主体性こそ

四 自発性と幼児後期

活気に満ちたボビー君の一日　大人の囲いの中でのサーシャ

五 自信と学童期

ある家出少年　良くも悪くも「自由」なアメリカ　ソ連における

建前と現実　足並そろえに懸命の日本

六 自己発見と思春期

多感ゆえに不安な時代　母なるものへの訣別の時　クローズアップ

プされる父親の存在 自分を見つめる作業

第三章 大人の時代——親の発達学 148

一 成熟への入口

愛の変貌 愛と結婚について 働くことの意義

二 さまざまな親

平凡を貫く確かさ 働く母の豊かさ そして私の場合

三 しめくくりの時

人望厚い教師 老いの変貌 強かった父と子の絆

第四章 ほころびとのつき合い方 187

一 青春の蹉跎と親の受容

親には青天の霹靂 行き違う母と子の気持 父と母の立場をしっ
かりと 大きくなるための試練

二 多動児を持つ親の覚悟

親という素人では…… 母親の自信欠如という強敵 責任の放棄

はできない

三 正直に我が子に接する

反抗のための反抗 専門医と親とのつき合い方 ジグソーパズル
の欠けた切片 親との真実のふれ合い

四 逆境にこそ明るさを

祖父母と父母の間で 心に描く二つの太陽 子どもへの回帰を願
って 母へのアンビバレンスの中で 挫折をのりこえた明朗さ

第五章 私自身の親と子の旅 239

一 子どもの時代

田舎ものでナイーヴ 豊かな自然のなかで 祖母と母より与えら
れたもの 後からきた父との交わり

二 母親の時代を迎えて

乳児と共に成長する母性 幼児の冒険心に拍手して 学業だけを
強いることなく 思春期の飛翔を信じて

親と子——アメリカ・ソ連・日本——

第一章 成熟することのむずかしさ

一 未熟な日本の子ども

おや、日本人は外国人とは随分ちがうな。外国に居る時、私は何度かつぶやいたものである。たとえば、スポイリング。

日・米・ソ三つの国に住んで、三者三様のスポイリング様式があると思った。

スポイリングとは、甘やかして子どもを駄目にする事。これは子どもに対する親の愛の変型である。否、愛の間違った表現型と言うべきかもしれない。これを見てみると、それぞれの国の親子関係のあり方のちがいが、おのずと浮かび上がってくる。

子どもに好きなことをやらせるのは、アメリカ式スポイリング。

子どもが喜ぶようにしてやるのは、ソ連式スポイリング。

子どもの「ため」を思って、懸命に子どもに手を貸し、支えるのは、日本式スポイリング。